

柏原区平和池水害資料収集・編纂特別委員会編
『柏原 75 人の鎮魂歌——平和池水害を語り継ぐ——』

京都府亀岡市篠町柏原区、2009、313 + 72 頁

谷端 郷*

過去の災害から教訓を学び、その教訓を今後の防災や減災に役立てることを目的として、これまで様々な災害の記録が刊行されてきた。たとえば、被災した自治体によって編纂された「災害誌」と呼ばれる災害記録集や、吉村昭¹⁾や柳田邦男²⁾などの作家による災害に関する記録文学、信濃毎日新聞社³⁾や神戸新聞社⁴⁾のような報道機関による災害記録集・報道写真集、そして災害研究に携わる研究者⁵⁾による報告などである。しかし、被災した地域住民自身によって災害の記録集が編纂・自費出版された例はきわめて少ない。

本書は1951(昭和26)年に京都府亀岡市篠町(当時京都府南桑田郡篠村)で発生した平和池水害の記録集である。平和池水害とは、1951年7月11日、梅雨末期の前線に伴う豪雨により、平和池と呼ばれる治水と灌漑の両機能を備えたため池が決壊し、鉄砲水によって下流の同町柏原区を襲い、75名もの人名を奪った災害である。50年という月日は被災の記憶を風化させる。また、本書によると、地域住民自身が資料収集を進めていくなかで平和池水害に関する公的な記録があまり残されていないことに気付かされたという。これらのことが、地域住民に被災した事実を後世に継承すらできないのではないかという危機感を持たせ、自らの手で記録を残していくという使命感を高めたものと思われる。そして、何よりも被災の事実を記録し後世に継承せずして、被災地区の死者75名は浮かばれないという鎮魂の思いが、本書編纂の強い動機である。これは、本書のタイトルにも表れている。

本書は被災後50年を機に、記録の必要性を痛感した地域住民によって編纂が開始された。本書の編纂にあたっては、亀岡市篠町自治会の下位組織である柏原区に水害特別委員会が設置され、同委員会が資料の収集や記録集の編纂にあたった。そして、「あとがき」にもあるように、編纂は困難を極めたが、本書は本格的に編纂作

業が開始されてから7年の歳月を経て完成された。第一部本文編の執筆者は、京都新聞の元記者であり、本文は2005(平成17)年に43回にわたって京都新聞に連載された記事がベースとなっている。ちなみに、本書は「第3回ふるさと自費出版大賞」(全国新聞社出版協議会)の大賞も受賞している。

本書は二部構成で、第一部が本文(文章)編ともいえるべき「平和池水害の検証と教訓」、第二部が資料編である。第一部は、第一章「平和池ダム決壊—集落の壊滅」、第二章「通報と救助活動」、第三章「復旧復興への歩み」、第四章「平和池ダム決壊の波紋」、第五章「地域災害に備える“向こう三軒両隣”」の5章構成となっている。第一章と第二章では被災状況および救援活動などの災害発生の「その時」が、第三章と第四章では復旧・復興段階と水害訴訟の実態などの「その後」が詳述されている。いずれの事実関係も収集した資料、および被災者や救助にあたった消防団員、電気通信施設の復旧従事者のような経験者への聞き取り調査結果が情報源とされており、災害記録としての価値も極めて高いといえる。また、本文の末尾には、水害時の時間経過や水害特別委員会の活動記録年表、亀岡市の災害年表も付けられている。第二部の資料集には、死亡世帯一覧表や死者数の分布図などの被害概要、平和池の断面図などが掲載されている「亀岡防水溜池事業地区計画」、訴状など「平和池水害損害賠償請求事件」関係の資料、国会の議事録が収録されている。

ここで、第一部の執筆内容をもとに本書の編纂を通して得られた防災・減災の教訓について考察してみたい。第五章では、第一章から第四章までの事実関係を踏まえて、後世に継承すべき教訓が導き出された。まず、平和池の決壊は、その後日本における同様のダムの設計基準が強化されることにつながったようである。また、気象予報や避難指示・誘導の連絡体制がいまだ整備されていない時代の災害であったことから、「防災とは、災害を不意打ちにしないこと」、すなわち突発的な災害への備

* 立命館大学大学院文学研究科

えの重要性が説かれる。そして、当時、同地域には農業を営んでいた世帯が多く、自ら河川の異常を察知し、緊急行動をとった地域住民が多くいたことが書かれている。このことから、今日においては身近な地域の自然環境を日常的に知ることの大切さも説かれている。さらに、本書の編纂で終わることなく継続的な取り組みの必要性も指摘され、実際、本書の編者らは語り部による伝承や水害資料室の設置などに取り組んでいる。ここで得られた教訓は、行政の対応に関するもの（公助）というよりも、各自がどのように身を守るべきか、地域がどのように助け合って救助や災害対応をするべきかなど自助や共助に資するものであった。ここに、地域住民自身で記録し教訓を導き出すことの意義を見出すことができる。

なお、本書には死亡者の分布図が掲載されているが、氾濫流の方向や土砂の堆積範囲、浸水範囲などの地図化を通して被災状況をより分かりやすく読者に伝える工夫は今後に残された課題であろう。また、被災前、平和池ダム建設計画の進行中に地元住民は、付近に昔ため池を作ったがすぐに崩壊したという伝承もあって、ダム建設に反対したという。さらに、当地には洪水になったら南へ逃げろという伝承も残されており、それらを詳細に検討することも今後の課題であろう。

以上のように、本書は地域住民の手による災害記録集であり、被災の経験から導き出された様々な防災・減災の知恵や教訓が詰め込まれている。そして、様々な困難がありながらも、死者に対する鎮魂の思いによって初志

を貫徹できた点に鑑みると、本書の編纂は地域住民であるからこそ成し遂げられたものであるといえる。ここで得られた知見をもとに災害リスクの低減を目指すためには、これらの知見を今後の防災計画や事業に積極的に活用することも重要である⁶⁾。今後の防災計画や事業に、地域に埋もれた被災の経験や災害にまつわる伝承を活用していくにあたっては、地域住民自身がこれらを体系的にアーカイブし継承することの意味は大きい。この意味でも本書のような地域住民が主体となって編纂に関わる災害記録集の重要性は極めて大きいと思われる。

注

- 1) 『三陸海岸大津波』（文春文庫、初出は1970（昭和45）年）や『関東大震災』（文春文庫、初出は1973（昭和48）年）がある。
- 2) 1945（昭和20）年9月に広島を襲った枕崎台風を描いた『空白の天気図』（文春文庫、初出は1975（昭和50）年）などがある。
- 3) 信濃毎日新聞社出版局編『寛保2年の千曲川大洪水「戊の満水」を歩く』、信濃毎日新聞社、2002、206頁。
- 4) 神戸新聞社編『阪神・淡路大震災10年全記録―被災地は復興したか―』、神戸新聞総合出版センター、2004、151頁。
- 5) 最近では歴史学者で長年災害研究に携わってこられた北原糸子氏を中心に『日本歴史災害事典』が編纂された。北原糸子・松浦律子・木村玲欧編『日本歴史災害事典』、吉川弘文館、2012、838頁。
- 6) ①吉越昭久「歴史災害の復原から明らかにされる減災の知恵」、(吉越昭久・片平博文編『京都の歴史災害』、思文閣出版、2012、所収)、3～14頁、②吉越昭久「歴史災害の復原からみる減災の知恵―火災と水害をもとにした抽出と応用―」、(立命館大学「テキスト文化遺産防災学」刊行委員会『テキスト文化遺産防災学』、学芸出版社、2013、所収)、29～41頁。